



## 第四十五回 志摩鳥羽城

—敵味方に分かれた父子の悲劇—

山本 忠博

天下を二分した関ヶ原の戦いで、一族が敵味方に分かれた例はいくつかあります。最も有名なのが真田一族ですね。真田一族の場合は、勝った徳川方（東軍）についた長男の信之が、敗れた石田方（西軍）についた父の昌幸と弟の信繁（通称幸村）を、戦後に助命嘆願し、なんとか両者の命を救っています。敗者の命が救われた点で、真田一族の例は不幸中の幸いといえるでしょう。しかし、敵味方に分かれた一家が、すべてこのように上手くいった訳ではありません。今回は、真田一族と同様に、父子で敵味方に分かれ、相互に相手のことを思いやりながら、悲劇的な結末を迎えた九鬼父子と、その居城である志摩鳥羽城（現三重県鳥羽市）（以下単に「鳥羽城」といいます）を、ご紹介しましょう。

### 九鬼嘉隆と鳥羽城

鳥羽城と九鬼一族を語るうえで軸になる人物は、九鬼嘉隆です。後世において海賊大将と称された人物で、その呼称から想像されるとおり、水軍の頭領です。義隆の本拠地は志摩国（現三重県志摩半島）でした。義隆の飛躍は、この地の水軍を率いて織田信長に協力するようになってからです。信長の伊勢（現三重県）への攻撃の際（1569年：対北畠氏、1564年：対伊勢長島一向一揆）に、嘉隆が、敵城攻略や海上からの織田軍の援護で活躍し、その効により信長から志摩国の支配を認められました。

信長配下の義隆の名を決定的にあげたのは、木津川口の戦い（1576年：第一次、1578年：第二次）です。信長に対抗する石山本願寺（現大阪市）へ兵糧や物資を入れようとする毛利水軍との戦いですね。もっとも、第一次木津川口の戦いでは、毛利水軍に完敗しています。この完敗に激怒した信長は、義隆に、再来するであろう毛利水軍への対策を練らせました。その応えとして、義隆が造ったのは、6隻の鉄甲船です。それらは、大型船に鉄板を隙間なく貼り付けて耐火性を格段に上げ、さらに大砲を積

んだ、前代未聞の軍船でした（鉄板張りの真偽は実は不明です。確かなのは大砲の搭載だけです）。これらの鉄甲船を駆使して、嘉隆は、第二次木津川口の戦いで毛利水軍に勝利し、大阪湾の制海権を握って、後の石山本願寺の降伏におおいに貢献しました。

信長亡き後は、嘉隆は、一時的に信長の次男に仕えたものの、この次男が羽柴秀吉と対立すると秀吉の下に走り、以後は、秀吉の配下となりました。秀吉の下で従五位下を叙任し（1585年）、朝鮮戦役の文禄の役（1592年）でも、水軍の将として活躍しています。そして、1594年に、居城を海の近くとするため、鳥羽湾の島に鳥羽城を築城しました。

鳥羽城は、海に出撃することを意図して、海側に大手門を開いた水軍の城でした。そして、海に浮いたようなその姿から、鳥羽の浮城と呼ばれました。また、城の壁は、海側を黒に、陸側を白に塗られていたそうです。この配色は、海側の光の乱反射を防いで、魚への影響を減らすためでした。その色から、二色（錦）城と呼ばれたといえます。

### 九鬼家の分裂

嘉隆は、鳥羽城を築城した後、1597年に家督を息子の守隆（もりたか）に譲って、隠居しました。このまま終われば、嘉隆は戦国大名の勝ち組に入りますが、これで終わらないのが、戦国時代です。

周知のとおり、1600年に関ヶ原の戦いが起こります。それに先立つ会津征伐（徳川家康 vs 上杉景勝）に際して、守隆は徳川家康に従って、会津に向かっていました。その途上で、石田三成の拳兵によって関ヶ原の戦いが始まるわけですが、この時点で、守隆は明確に徳川方についています。ところが、会津手前の守隆がビックリする事態が起こります。隠居していたはずの嘉隆が、石田方について、鳥羽城を乗っ取ってしまったのです。

嘉隆はなぜが石田方についてたのか、実のところは判りません。伏線として、嘉隆が徳川家康を快く思っていなかつ

た可能性はあります。家康は、嘉隆と仲の悪かった隣国の大名に有利な、つまりは嘉隆に不利な税制上の裁断をしたことがありました。さらに、その大名が徳川方だったので、“敵の味方は敵”という理屈は成り立ちます。とはいえ、嘉隆は隠居の身ですから、自前の兵力を持ちません。石田三成から大々名を約束する破格の好条件を示されても、一度は参戦を断わっています。それでも、三成が、嘉隆の娘婿を通じて説得を続けると、ついに嘉隆は石田方について参戦することを決断します。この決断の動機は上述のとおりよくわかりませんが、上述の敵の味方は敵の理屈や大々名への野望の他に、一般には、家名存続の保険と言われています。それはともかく、嘉隆は、参戦を決めると、上述の娘婿のカを借りて瞬間に鳥羽城を占拠し、上述の隣国の大名に攻撃を仕掛けました。

### 九鬼父子の戦い

困ったのは息子の守隆です。志摩国の平定を家康に約束して志摩国に戻ったものの、父親とは戦いたくありません。鳥羽城を明け渡すように、父に使者を立てますが、父は断固拒否の構えを崩しませんでした。守隆は、鳥羽城の父と対峙する間に、他の石田方の将と戦って確固たる手柄を立てつつ、なんとか時間を稼ぎます。ちなみに、このときの戦いが、広義の関ヶ原の戦いにおける、徳川方の最初の勝利になります。しかし、長く父を放っておくわけにもいかなくなります。なにしろ、守隆には、徳川方の目付（監視）がついていたので、中途半端な行動は、敵への内応ととられかねなかったのです。守隆は、仕方なく鳥羽城への進撃を開始しました。これに対して嘉隆は、鳥羽城とその城下を戦場にするのに忍びなかったらしく、鳥羽城を出て、別の場所で守隆を迎え撃ちました。

さて、父子両軍の戦いで、双方はどう行動したのでしょうか。父の嘉隆は、息子の軍に対して空砲を撃ち続けたといえます。対する守隆は、目付の前で中途半端な行動をとれず、実弾で攻撃をしたといえます。これでは、はなから勝敗は見えていますね。上述の嘉隆の娘婿は積極的に守隆に襲いかかったようですが、それも守隆に撃退され、嘉隆達は、兵を引くことになります。

### 守隆による嘉隆の助命嘆願

嘉隆が兵を引いてすぐに、関ヶ原の本戦の勝敗があっさりつき、ご承知のとおり、守隆のついで徳川方が勝利しました。行き場をなくした嘉隆は、別の娘婿の所に身を隠しました。ここから、守隆による父嘉隆の助命嘆願運動が始まります。

守隆の嘆願に対して、家康はなかなか首を縦に振りませんでした。しかし、他の有力大名が守隆の嘆願を援護してくれたことと、守隆の戦功が評価されて、最終的には、守隆は嘉隆の助命の約束を取り付けました。

守隆は喜び勇んで、父のもとに命が助かったことを知らせる急使を走らせました。ところが、ここで悲劇が起こります。急使が道の途中で、嘉隆の首を運ぶ者と出会ったのです。実は、タッチの差で、嘉隆は、九鬼家の行く末を案じた家臣の薦めで切腹をしていたのでした。嘉隆としても、息子の立場を悪くすることに忍びなく、甘んじて切腹を受け入れたようです。ここまで戦国の荒波を泳ぎきってきた嘉隆としては、なんとも不運な最期でした。

怒りのやり場のない守隆は、切腹を薦めた家臣を、かなり残忍な方法で処刑したといえます。

### 九鬼家のその後

嘉隆の命の犠牲の上に鳥羽城を守った九鬼家ですが、守隆は、代譲りの際に失敗します。守隆の死後に、お家騒動の状態になり、幕府の介入を受けました。九鬼家は、家名こそ保ったとはいえ、二家に分裂のうえ、鳥羽城を離れて陸に上がることになります。結果として、九鬼家は、鳥羽城と水軍を完全に手離すことになりました。

### 現在の鳥羽城

鳥羽城は、幕末の地震で多くの建物が倒壊し、その復旧を見ないまま、明治期の破却を迎えました。本丸には、古くは三層の天守が上っていたようですが、その跡地も小学校の運動場として利用され、かなり破壊されたようです。今は、運動場もなくなって、本丸跡は広場になっており、ここから鳥羽湾を一望できます。また、本丸には、古い石垣が一部残っていますので、それから古の姿を想像することもできます。ただし、三之丸の辺りの石垣は、かなり新しい時代に積まれものと思われまので、古い時代のものとは勘違いしないでくださいね。



鳥羽城跡